

『フランケンシュタイン』 明治中期の初邦訳 (2)
「新造物者」の翻訳者をめぐって

中 川 僚 子

The First Japanese Translation of *Frankenstein* in the Mid-Meiji Era (2) : Identifying the Pseudonymous Author

This paper explores the identity of the pseudonymous translator, “Hisago-no-ya Shujin (the master of the gourds’ house)” who rendered Mary Shelley’s *Frankenstein* into Japanese in 1889–1890. It will argue that various circumstantial evidence points towards the likelihood of the translator being Miyake Kaho, an emerging young author. Kaho was well-versed in Japanese literature, being a *waka* poet and novelist. The “Gourd” was known to be her literary pseudonym. Kaho’s exceptional family background could have allowed her to obtain a copy of the Routledge World Library edition of *Frankenstein*, the base text of the translation, through several possible routes. Her educational background, unusually rich and including English learning, made her one of the most well-educated women of the time, forming an interesting parallel to Shelley herself.

明治22年6月から翌23年3月にかけて、雑誌『國のもとゐ』に連載されたメアリ・シェリー作『フランケンシュタインあるいは現代のプロメテウス』(Mary Shelley, *Frankenstein, or the Modern Prometheus*, 1818)の初邦訳「新造物者(あたらしきぞうぶつしゃ)」は、日本におけるイギリス文学の受容史を考える上で重要な作品であるにもかかわらず、基本的情報の一つである訳者は今だに特定されていない。「新造物者」が『フランケンシュタイン』の翻訳であることを明らかにした横田順彌も、「瓠瓢舎主人(ひさごのやしゅじん)」と名乗るその翻訳者については推測を述べるにとどまっている。⁽¹⁾

「新造物者」は多くの謎に包まれている。すでに明らかになっているのは、原作の全3巻中2巻末で翻訳が途絶した理由が、掲載誌発行元の東京高等女学校の事実上の廃校にあることと、原作冒頭に収められた北極探検途上の若き探検家ロバート・ウォルトン船長の4通の書簡のうち、最初の2通が「新造物者」に欠けているのは、底本としてRoutledge World Library版*Frankenstein*という簡約版を使用したことによる可能性が高いことの二点である。⁽²⁾

「瓠瓢舎主人」の正体を特定する際の前提として、まずは以下の4条件を挙げたい。

- (1) 翻訳を実践し得る英語の読解力と日本語の表現力を備えていること
- (2) 「瓠瓢舎主人」を筆名とする必然性があったこと
- (3) 底本となったRoutledge World Library版*Frankenstein*を入手し得る立場にあったこと
- (4) 連載誌『國のもとゐ』およびその発行者である東京高等女学校に関わりがあったこと

これらの条件を踏まえた上で、さらに状況証拠を積み重ねていくと、「新造物者」の翻訳者として浮上してくるある人物がいる。⁽³⁾ 本稿では、上記の4条件を順に辿りながら、メアリ・シェリー原作『フランケンシュタイン』初邦訳の訳者が、20代初めの新進作家であった田邊^{なつ}龍子、後の三宅花園で

ある可能性について論じたい。なお、以下では混乱を避けるために、結婚前も含めて三宅花圃あるいは花圃と呼ぶことにする。

1. 作家、三宅花圃

三宅花圃は、坪内逍遙の『当世学生気質』に触発されて明治21年に発表した『薺の鶯』によって、日本で近代小説を書いた最初の女性作家とされる。⁽⁴⁾ 樋口一葉の文壇デビューの立役者として、またその後も4歳下の一葉が小説家として認められるために尽力したことで知られているが、皮肉にも一葉の影に隠れてその文学的評価はまだ十分に進んでいるとは言えない。とはいえ、近代日本文学史に名を残した作家であることは間違いなく、明治末期には『現代才媛文範』において、「女史は、田邊蓮舟翁の息女にして、三宅博士の室たり。はじめ、小説をものし、作品多からざるも、老練の手つきは、樋口一葉とともに当代閨秀の首班と称せられき」と高く評されている。⁽⁵⁾ 戦後においても塩田良平が、中島湘煙、木村曙と比較し、「前者は結婚後筆力を失い、後者は早世して、共に先駆的作家の名をとどめるにすぎないのに対し、花圃は作品でも文壇の声価でも両者を圧倒し、女流文学の開拓者として、明治30年頃までは女性作家の統率的位置にあった」と述べている。⁽⁶⁾ 文学史では、樋口一葉との比較において花圃の研究も付随的に行われる場合が多いなかで、宮本百合子の「婦人と文学」(1947)、塩田良平『樋口一葉研究』(1956)は、花圃について多くの紙幅を割いて作品と意義を論じている。昭和18年に亡くなって以降も、明治期の文学全集には作品が収録され続けて現在に至っている。

明治21年に金港堂から出版された『薺の鶯』以降、花圃は数多くの小説、随筆・随想、そして和歌を残している。著作は、数こそ少ないものの翻訳も含み、滝藤満義の「花圃と一葉—小説家の誕生」には、明治24-26年に発表された三点の翻訳・翻案小説が挙げられている。⁽⁷⁾ 明治24年8月に『女学雑誌』281号に掲載された「淮北の枳(わいほくのからたち)」、明治25年3月刊行『みだれ咲』所収の「老婚」、明治26年1月に『女学雑誌』335号、

336号に分けて連載された「内助」の三作品である。いずれも原作は明らかではないものの、翻訳者としての実績はあると言ってよいだろう。このうち「准北の枳」はスイスが、「内助」はフランスが舞台とはなっているが、花圃が英語以外の外国語を学習した記録はなく、原作がドイツ語あるいはフランス語であったとしても、英語版からの重訳ではないかと推測される。

明治150年を控えた2013年あたりから、おそらく明治維新の歴史的意義の見直しの機運につれて、フィクションの題材として三宅花圃の周辺に注目が集まってきている。2014年直木賞受賞の朝井まかての小説『恋歌』は、幕末から明治を生きた女性歌人中島歌子がヒロインであるが、狂言回しは歌子の一番弟子であった三宅花圃となっている。2017年2月から2018年3月まで木内昇が『日本経済新聞』に連載した『万波を翔る』は、幕末に外交の舞台裏で活躍した父田邊太一の若き日を描いたもので、明治元年の花圃の誕生で終わっている。2022年12月からは、講談社の文芸誌『スピーン』で、三宅花圃と樋口一葉の二人を主人公とする大森美香『花と葉』の連載が始まった。

原作も翻訳も、それぞれフランス革命、明治維新という近代に向かう大きな時代の変革期から約20年の月日を経て生まれている。よく知られるように、1797年8月30日に生まれた原作者メアリ・シェリーは、1816年6月16日『フランケンシュタイン』の原稿に着手したときには18歳で、1818年1月に、匿名で初版を刊行したのは20歳であった。「新造物者」の連載開始時に、西暦では1869年2月生の花圃は20歳であり、終了時には21歳であったと考えられる。

メアリ・シェリーと三宅花圃という卓抜な文才をもつ二人の早熟な女性作家が、もし約70年の時間を隔てて、作者と翻訳者として『フランケンシュタイン』という作品を媒介として遭遇を果たしていたとしたら——そしてその可能性は高いと筆者は予想しているのだが——そこには近代化、女性、そして教育をめぐるさらに興味深い問題が浮かび上がってくるに違い

ない。

2. 「瓢瓢舎主人」とは誰か

「新造物者」の表題の隣には「瓢瓢舎主人稿」とのみ記されている。「瓢瓢（ひさご）」とはひょうたんの意であるが、これが翻訳作品であることは俄かにはわからない。1899年にベルン条約に加盟する前、日本では作者の名前を記さず、翻訳者の名前のみを記すことが許容されていた。当時、一人の作家が「一のや/屋/舎」「一主人」などの匿名性の高い号を使うことも、また複数の号を使用する場合もまれではなかった。匿名性が高いというものの、見ればどの作家かすぐにわかる場合もあり、たとえば坪内逍遙が「春のや主人」「春の舎おほろ」「春の屋隴主人」など、複数の筆名を使っていたことはよく知られていた。⁽⁸⁾

明治中期に「ひさご」という筆名を使用していた作家の一人が田邊龍子であった。⁽⁹⁾ 旧幕臣の田邊太一と己巳子（きみこ）の間に第二子として誕生した龍子は、明治25年に三宅雪嶺と結婚した後は三宅花圃として書いたものがもっとも多いが、三宅龍子として書いた場合もあれば、数点の小説は「夢借舎丁々子（むしゃくしゃちゃちゃこ）」という茶目っ気のある号を使って発表している。また、『女学雑誌』では明治23年から「花圃」と「ひさご」という二つの号を使用していたことが知られている。⁽¹⁰⁾ 河野龍也は、花圃はもっと早い段階から「ひさご」を画号としていたのではないかと推測し、伊東夏子への手紙の中でひょうたんの絵を署名代わりに使っていることをその根拠として挙げている。⁽¹¹⁾ 「花圃」の号は、8歳から通った跡見塾の敬慕する師跡見花蹊にちなむこと、和歌の師である中島歌子の歌塾が「萩の舎」という名であったこと、「春の舎おほろ」「はるの舎主人」坪内逍遙が花圃の小説『薺の鶯』に朱を入れ、刊行時には序文を寄せたことなどを考え合わせると、「ひさご」「の舎」「主人」の三要素の組み合わせを使った筆名を使用して翻訳したと考えても無理はないだろう。⁽¹²⁾

ちなみに、「ひさご女史」という号は、跡見塾時代に跡見花蹊の姉、千

代瀧が短冊に書いてくれた歌に由来するという。歌は「ぶらぶらと暮らすやうでもへうたんの胸のあたりに締めくくりあり」というもので、「これはあなたのことですよ」と言われたのをそのままいただいたと花圃は語っている。⁽¹³⁾ この逸話で気になるのは、ひょうたんが花圃のエンブレムとしてふさわしいと考えた千代瀧による「胸のあたりに締めくくりあり」という人物評である。これは推測でしかないが、「御一新にめぐりあはせ、徳川瓦解の砂埃をあびて生まれたといふことが、やはり、環境的に私の性格などに影響してゐるらしく思はれるのでございます。時の敗者ではあっても、旧幕臣の気概とか意地とかいったやうなものを、子供の時分から、ずる分と見たり、聞いたりして参りました。」という花圃の自己省察にうかがわれるその一生を貫いた「旧幕臣の気概とか意地」と考えるのも穿ちすぎではないだろう。⁽¹⁴⁾

3. 三宅花圃と英語教育

三宅花圃の受けた英語教育を論じる前に、その成育環境についても触れておかねばならない。一葉自身、雑記「筆のすさひ」における一連の周囲の人物評の中で、花圃を最初に取り上げ、「学は和漢洋のミつに渡りて今昔しのをしえの道あさらにさとり給ひしは我師の君いつの高弟にてあいよりあをしと師はの給へり和歌は天ひんと〔故〕伊東祐命うしもたたえ給へりしとそ文章は筆なめらかにしてしかも余いにとませ給ひ俗となく雅となく世の人もて遊はぬはなし」とその教養の豊かさを清少納言にたとえて讃えている。⁽¹⁵⁾ 花圃は、明治初期に生まれた日本の女性としては、おそらく例外的に充実した教育を受け、「和漢洋」の「洋」すなわち英語および英語圏文化にも縁が深かった。

父田邊太一（田邊蓮舟1831-1915）は、『幕末外交団』の著書を持つ旧幕臣であった。太一は儒学者田辺石庵を父として生まれ、昌平黌に学んだ後、徳川幕府の外国方、外国奉行調方を経て、文久3年（1863年）32歳で横浜鎖港談判施設団に外国奉行支配組頭としてフランスに随行した。⁽¹⁶⁾ 慶応3

年（1867年）には、パリ万国博覧会使節団に随行している。花圃の言によると、明治新政府の成立後も旧幕府軍を支援し、上野戦争の後、「世の中がいやになった」と言って表向きは商人として横浜に商売にでかけたが、実際は函館の五稜郭に立て籠った義弟荒井郁之助や榎本武揚らのための軍資金の調達にあたっていたという。⁽¹⁷⁾ その後、徳川宗家の静岡移封後に駿府に移り沼津兵学校教授に就任。新政府に請われて再び外交の世界に戻り、明治4（1871）年には、岩倉使節団に一等書記官として随行した。その後、明治12年清国に赴任し臨時代理公使を経て明治15年に帰国。元老院議員となり、晩年は維新資料編纂委員を務めた。⁽¹⁸⁾

花圃によると、太一の長男である兄田邊次郎一は、中村敬宇（正直）の同人社において英学を学んだ後、海外の事情を知るために香港の中環書院に1年間留学し、優等で卒業したのは16歳であった。実業界を目指して商法講習所（一橋大学の前身）に入学すると、ここでも優秀な成績をおさめて翌年には卒業。⁽¹⁹⁾ 卒業後は三井物産に勤務して、19歳にしてロンドンの三井物産支店長を任されたが、明治19年4月、病を得て帰国の途上に、地中海を航行中の船上で亡くなった。⁽²⁰⁾

花圃の従兄田邊朔郎は、琵琶湖疎水の設計・施行の責任者として今も知られる。朔郎は次郎一より2歳年長だが、生後9ヶ月で父を亡くし、叔父太一が後見となった。⁽²¹⁾ 明治2年に太一が徳川家が開設した沼津兵学校の教授になると、その附属小学校に進んだ。この兵学校附属小学校が、7、8歳以上の士族、庶民の子弟に算術・地理・体操・乗馬・水泳などを教え、明治3年には英語とフランス語も導入するなど先駆的な教育を行う小学校であったことが、朔郎の将来に大きな影響を与えたことは想像に難くない。⁽²²⁾ 明治4年に、太一が新政府に請われて外務省に任官されると、朔郎も翌年上京し、「東京の三塾」と称された英学塾、湯島の共慣義塾（他の二塾は慶應義塾と同人社）に入学した。明治8年、15歳で新設の工学寮附属小学校に転じ、そのまま明治10年に工学寮、そして改称後の工部大学校に学んだ。⁽²³⁾ 工学寮の教育は九人のイギリス人技術者によって英語で行

われていたが、朔郎の才能は教授たちに認められ、特に教頭であったヘンリー・ダイアーとは、卒業後も生涯にわたって親交を続けた。⁽²⁴⁾ 明治16年に「琵琶湖疏水工事計画」と題された卒業論文を提出して工部大学校を卒業。京都市より琵琶湖疏水工事を命じられ、明治21年にはアメリカを訪れ、コロラド州のアスペン水力発電所を視察している。⁽²⁵⁾

花圃と英語圏をつなぐ人物には、このほか、母己巳子（きみこ）の実兄荒井郁之助（1836-1909）、そして『藪の鶯』の出版を介して知己を得た小説家・翻訳家の坪内逍遙もいる。榎本武揚の海軍総指揮官として箱館戦争を戦った荒井郁之助は、新幕府に登用されて、開拓使辞書として知られる『英和対訳辞書』を明治5（1872）年に編集・刊行している。⁽²⁶⁾ 坪内逍遙は、言うまでもなくシェイクスピア全作品の翻訳者として知られる。父の浪費のため、次郎一の葬儀費用が出ないと母と住み込みの書生が嘆いているのを隣の部屋で聞いていた花圃が、『当世書生気質』を読んで、小説の執筆を思い立ったというのは有名なエピソードであるが、田邊家の別の書生が逍遙と同郷であった縁で、『藪の鶯』の草稿を見てもらうこともできた。⁽²⁷⁾

先述した通り、筆者はすでに別稿でRoutledge World Library 版 *Frankenstein* が「新造物者」の底本であった可能性が高いことを明らかにしたが、残念ながら、この版が当時日本に輸入されていたかどうかは特定できていない。1882年に出版されたこの版を花圃が入手し得る経路は、横浜で商売をした父太一、ロンドンに赴任中の兄次郎一、アメリカに視察に出かけた従兄朔郎、伯父の荒井郁之助、坪内逍遙など、複数あったと考えられる。

そもそもRoutledge World Library 版が、19世紀末イギリスにおいて下層中産階級・労働者階級の教化のためにラウトレッジ社から出されたいくつもの廉価版シリーズの一つであることを考えると、日本に入ってきたルートを確定することは困難に思われる。

底本はイギリスから直接持ち込まれた可能性も、アメリカ、カナダなど他の英語圏を経由した可能性もあるが、イギリスから直接持ち込まれた可

能性がやや高いかもしれない。根拠は確たるものではなく、(1)『國のもとゐ』に掲載された記事には、イギリス由来のものが多く散見されたこと、(2)「新造物者」が最終回前に3ヶ月ほど予告なく休載された際に、おそらくその埋草として英語原文のまま『國のもとゐ』に連載された小品“Passion and Principle”が、ロンドンに拠点を置く出版社W. and R. Chambersの*Chambers's Miscellany of Instructive and Entertaining Tracts*から収録されたと思われることである。⁽²⁸⁾ ただし、東京高等女学校で当時英語の教鞭をとっていたいたのは鳩山春子、神田乃武ら日本人とイザベラ・プリンス、メアリ・プリンスというアメリカ人姉妹であったことを考えると、アメリカなど他の英語圏の国を経由した可能性も排除はできない。

4. 花圃の教育

「まるで渡り鳥のように、学校を転々としたしておりますて、お話申し上げるのもお恥ずかしい次第ですが」と前置きをした後、花圃は、東京高等女学校入学の経緯を記している。⁽²⁹⁾ 明治女学校をやめて、「ぶらぶらして」いたところ、友人の江崎まき子（乙骨まき）から「一橋の女学校へ入ろうと思うが」と新設の官立女学校と一緒に入学する誘いを受けた。学校に行くと、校長の箕作佳吉は父太一の旧幕関係の友人の息子で、入学試験は得意の「徒然草」と「文章軌範」で難なく合格した。学校側はどの学年に入れようかと当惑したが、物理・化学・数学などを知らないと花圃が告げたところ、3年に籍を置いて好きな学課を履修してよいという特別な配慮を受けることとなったという。その後、英語の授業内容が明治女学校ですでに習った範囲であったために遊んでいたところ、鳩山春子の怒りを買って「ポスト・グラデュエイト(専修科)」に移されたという(ただし注(31)に示すように、実際は「専修科」ではなく、「撰科」であった可能性もある)。当初は“daughter”のスペリングを尋ねられて“dota”と書いて皆に笑われたが、その後は、父の伝手で外務省の有賀長雄宅に英語を習いに通い、授業はよくできるようになったと語っている。

本人の回想によると、東京高等女学校は明治22年に「最後の卒業生」として卒業したということになっている。しかし、国立科学博物館の所蔵する校長矢田部良吉の「東京高等女学校卒業式式辞（推定）」によると同校では明治22年夏に予定していた卒業式は行われていない可能性がある。⁽³⁰⁾最後の卒業式が行われたのは明治23年3月で、東京高等女学校で卒業式が行われた旨の報告記事が『女学雑誌』にあり、卒業生の中には花圃の名前も見出せる。⁽³¹⁾明治22年5月に昭憲皇后が東京高等女学校を訪問した際、皇后の拝謁を賜った生徒作品が、『國のもとみ』に列記されている中に、「田辺たつ」の名が見出されるのだが、『薺の鶯』の作者として皇后に特別に紹介されたことを花圃が回想で誇らしく語っているこの出来事からさらに十ヶ月は在学していたと思われる。⁽³²⁾

三宅花圃は、女子にとってまだ中等教育が義務ではなく、高等教育の門戸も閉ざされていた時代にはめずらしく、途中の空白期間はあるものの、長期にわたって学校教育を受けた。「西洋通でハイカラ」な父太一の好みで「三つ四つの時分から、洋服を着、ベッドに寝、二頭立ての馬車に乗って歩いたものでございました」と花圃は語っている。⁽³³⁾太一は西洋通であるだけでなく、子どもに対して非常に教育熱心であったらしい。昭和14年の花圃の回想によれば、8歳で麹町小学校に入学するが、2、3ヶ月ほどで当時「官立の竹橋〔女学校〕やミッションのフェリス〔女学校〕」を除けば「私立女学校の草分け」と目された跡見花蹊の跡見塾（神田猿樂町）に移り、5年間自宅から通った。寄宿舎には入らず自宅通学を許された理由は、「ほかにもいろいろと稽古事」をしていたためで、7歳くらいからは琴と三味線を、「10歳ぐらいから」は、中島歌子には大人たちに混じって出稽古で和歌を習い始めていたという。⁽³⁴⁾

13歳で跡見塾を退いてからは、「数年間家でぶらぶら遊」んでいたというが、この間、漢学、国学をそれぞれ柴田権之進、伊東祐命から学んだ。15歳のとき、母親に「これからの人は、女でも英語を知らなければいけない」と言われ、矢嶋楯子の櫻井女学校（女子学院の前身）に通

い始めるが、クリスマスに何かプレゼントを持ってくるように言われたことに母が反発して数ヶ月でやめさせる。その後、明治女学校の校長木村熊二が父の弟子であったことから、明治19年3月4日から九段牛窪に新たにできた同校に入学。師中島歌子の代理として40-50人の生徒に習字の稽古の手伝いをする代わりに、英語の勉強（「ナショナル・リーダーの三か何かを習っておりました」）を始めたところ、4月にロンドンにいた兄次郎一の計報が入ったためひと半月で退学したという。⁽³⁵⁾

花圃の生まれを明治元年12月23日とすると—実際は、もっと遅く生まれたと自身は語っている—小学校入学から、おそらく明治23〔1890〕年3月に20歳で東京高等女学校を卒業するまで、学校を出たり入ったりしながら過ごしたことになる。⁽³⁶⁾ この長さは特筆に値する。空白期間が長く、実際に通学した期間は9年半程度と思われるが、先述したように通学していない期間も、後に中島歌子の一番弟子として萩の舎の後継者となった和歌を初め、漢学、国学、英語を先生について習うなど、勉強は継続していたとみられるからだ。

比較のため、当時としては非常に高い教育を受け、最後は花圃と同じく東京高等女学校を卒業した森鷗外の妹小金井喜美子の場合を、大塚美保の詳しい叙述に拠って概略したい。⁽³⁷⁾ 明治3年11月29日〔1871年1月19日〕生まれの小金井喜美子は、大塚美保の調査によれば、明治13〔1880〕年10月に9歳で千寿小学校を卒業した。その後、明治15年頃までは自宅で一晩おきに漢学の個人教授を受けていた。和歌と書は、歌人の関澄桂子のもとに通い、大塚の推定では、明治17年初め頃から国学者福羽美静のもとに祖母に伴われて泊まりがけで通い和歌の指導を受け始めたほか、佐々木弘綱の月例の歌合等にも参加した。福羽の勧めにより、明治18年10月に（後に東京高等女学校となる）東京師範学校附属高等女学校専修科に入学し、英語を専修した。その後、管轄の移行と改称を経て「東京高等女学校」となった学校を卒業したのは、明治21年6月であった。幼いときから読書を好んで、兄林太郎と関澄桂子の手引きで和歌と国文学に力を入れ、翻訳家とな

るまでには「古典諸書を読みこなす實力」を身につけていった。⁽³⁸⁾

花圃も相当な読書家であったらしく、回想によると佐々木信綱から勧められて、馬琴、露伴、西鶴に親しみ、またワシントン・アーヴィングの「スケッチブック風のもの」を暗誦していたという。⁽³⁹⁾樋口一葉が言うとおり、まさに「学は和漢洋のミつに渡りて今昔しのをしえの道あさらにさとり給ひし」だったのである。

「新造物者」が連載された『國のもとゐ』は、東京高等女学校の教員が中心となって刊行されたが、東京高等女学校については、由来と終結に政治的思惑がからみ、所轄の変遷、名称の変遷もあいまって、時代の先端をゆく女子教育を行った特殊性が注目されることは残念ながら少ない。ほぼ唯一の例外である青山なを『明治女学校の研究』は明治女学校の変遷を中心とする明治期女子教育の歴史的研究であるが、東京高等女学校についても歴史的文脈を明確に跡づけている。

青山なをに依拠しつつ、東京高等女学校の設立から閉校までの概略を示すならば、同校は初代文部大臣森有礼の肝煎りで明治19年に開設された。その最たる特徴は、男女平等を旨として男子と同じく女子もリベラル・アーツを学ぶ先端的な女子教育であった。明治19年の開校当初は「高等女学校」と称され、後に「東京高等女学校」と名をあらためて国直轄の官立女学校とされたが、明治23年3月には突然の閉校を迎えた。その背景には明治初頭から続く欧化政策の推進派と保守派との確執があった。⁽⁴⁰⁾

「高等」という名称を冠した日本で最初の女学校であり、男子と同じくリベラル・アーツを学び、外国語を重視するカリキュラムによって実験的とも言える先進的女子教育を行った東京高等女学校は短命に終わり、それに伴い開校三年目の春に刊行された『國のもとゐ』が発行された期間はわずか12か月であった。「新造物者」は閉校に到る一年間に、時代の流れに翻弄された東京高等女学校の試練の跡をいわば形にとどめ、それを今にも伝えているがこの間の事情については稿を改めて検討したい。

※資料調査にご協力いただいた流通経済大学三宅雪嶺記念資料館の坂井新二氏，平島敏幸氏にこの場を借りて御礼申し上げます。

※本研究はJSPS科研費 JP22K00490の助成を受けたものです。

注

- (1) もともと明治15年頃に出版された『フランケンシュタイン』の邦訳があると横田順彌に示唆したのは科学史研究家の勝田芳男で，その後，協力者の調査によって掲載誌と掲載号が明らかになったという。横田は「新造物者」の翻訳者を「絶対的証拠はない」と断った上で，評論家・翻訳家の磯野徳三郎（1857-1904）ではないかと推測しているが，理由は詳らかではない。横田順彌「明治時代は謎だらけ！『フランケンシュタイン』の諸訳について」（1996）12-14頁参照。磯野徳三郎はチャールズ・ディケンズ「船遊」（明治19年），エドワード・ブルワー＝リットン『サクソン王の名残／ハロールド物語』（明治20年）の翻訳者である。著書『依緑軒漫録』は，明治期における「ユゴー紹介の記念碑的作業」として評価されている（「磯野徳三郎」『日本近代文学大辞典』）。『依緑軒漫録』はヴィクトル・ユゴーの他，ディケンズ，ブルワー＝リットンを紹介したもので，屋木瑞穂によれば樋口一葉は三宅花圃から借りた本書を通読したことを日記に記している。屋木瑞穂 107-108頁。
- (2) 中川僚子「『フランケンシュタイン』明治中期の初邦訳—『新造物者』の底本について」3-27頁。
- (3) 三宅花圃が匿名の翻訳者ではないかという推察については，近刊の拙論でも言及している。Nakagawa, “Meiji Japan Responds to *Frankenstein*,” forthcoming.
- (4) 明治20年に『女学雑誌』に発表された中島湘煙の小説「善悪の岐」は，女性による日本文学史上初の翻案小説で，原作はブルワー＝リット

ンの『ユージン・アラム (Eugene Aram)』。『藪の鶯』はこの翻案小説を除いた女性による最初の小説とされる。

- (5) 久保天髓編述『現代才媛文範』294頁。
- (6) 塩田良平「三宅花圃」木俣修、川副国基、長谷川泉編『現代文学講座：人と作品 第3集 (明治篇 第3)』。塩田良平『明治女流作家論』も、第2章中期の1で三宅花圃を詳しく扱っている。
- (7) 『一葉文学 生成と展開』所収。
- (8) 坪内逍遙は、「春のや主人」「春の舎おぼろ」のさまざまなバリエーションを使用していたほかに逍遙遊人、柿叟^{しそ}という号も使っていた。「坪内逍遙」『日本大百科全書』。
- (9) 国会図書館デジタルコレクションで1800年から1889年の期間の「ひさご」という筆名の使用例を調べると、二人の人物がヒットする。一人は「ひさご家」と自称する戯作者とあるが、あいにく特定はできていない。もう一人は太田貞次郎という人物で、明治20年代に民権派の新聞記者として活動していたともされるが未確認である。太田貞次郎は、『浪華之縹綫：近世慨士』では「花廼家ひさご」、『閨中美人歎：春は花秋は月』では「花の家ひさご」を使っている。
- (10) 滝藤満義によると、『女学雑誌』に文章を寄せることになったのは、兄次郎一と親しかった巖本善治が、『藪の鶯』以降、1年半も文筆活動に空白のある花圃を説得したことが始まりであった。明治23年1月に掲載された小説「蘆の一ふし」が『女学雑誌』デビュー作となった。筆名は「ひさご」「ひさご女」「ひさご女史」を使っている。
- (11) 河野龍也「二人の夏子―樋口一葉と伊東夏子―」『年報』第35号(2016) 160-87頁。
- (12) 逍遙が朱を入れた『藪の鶯』の手稿は、現在流通経済大学の三宅雪嶺記念資料館に所蔵されている。
- (13) 三宅花圃「思ひ出の人々」111頁。なお大徳寺435世管長の大綱宗彦(1772-1860)に、これとよく似た「うかうかと暮らすようでも瓢箪

の胸のあたりにしめくくりあり」という瓢箪の絵の画賛の一部と見られる歌があるという。聖心女子大学教授の深澤了子氏にご教示いただいた。

- (14) 同上 106-107頁。
- (15) 「雑記5 筆すさひ 一」『樋口一葉全集』第3巻(下) 635-636頁。
- (16) 「横浜鎖港談判施設団の一行」『東京大学コレクション』および「古代をのぞく海外旅日記—杉浦讓の「文久奉使日記」から」『国立国会図書館建制資料室 日記の世界』による。当時はスエズ運河が開削中であったことから、一行は紅海に面したスエズからまずエジプトに上陸して、陸路アレクサンドリア港から地中海に出たという。杉浦讓の日記にはギザの3大ピラミッドとスフィンクスを見たことが記録されている。スフィンクス前で撮影した使節団の写真はよく知られている。
- (17) 「思ひ出の人々」108頁。
- (18) 「田辺太一」『近代日本人の肖像』および「田辺太一」『国史大辞典』による。
- (19) 「思ひ出の人々」109頁。花圃は、次郎一の出身校は「一橋の高商」と語っているが、在籍したと思われる期間にはまだ高等商業学校という名称にはなっておらず、場所も一橋ではなかった。「HUBの歴史 第1篇 商法講習所の設立から大学昇格まで1875-1920」および木山実「三井物産草創期の海外店舗展開とその要員」による。
- (20) 米川伸一は田辺次郎一の渡英を明治17年18歳のときとしている。米川は、若輩の次郎一がロンドン在勤歴の長い渡辺専次郎を差し置いて、支配人に抜擢されたのには、三井物産の益田孝が、田辺太一とともに文久三年の幕府遣欧使節メンバーとして渡欧したことが有利に働いた面と、次郎一自身の香港への留学経験が評価されていた面があると推察している。米川伸一 26頁。
- (21) 「思ひ出の人々」109頁。

- (22) 樋口雄彦「生徒のノートからみた沼津兵学校の教育」および沼津市HP「沼津兵学校附属小学校が『集成舎』となる」による。
- (23) 西川正治郎編『田辺朔郎博士60年史』39-40頁。
- (24) 加藤詔士「工部大学校書房掛猪俣昌武とお雇い教師ヘンリー・ダイアー」『東京大学史紀要』23（2005）26頁。
- (25) 『田辺朔郎博士60年史』87-91頁。
- (26) 『英和对訳辞書』は流通経済大学三宅雪嶺記念資料館に一冊が所蔵されている。
- (27) 「思ひ出の人々」116頁。
- (28) “Passion and Principle”は「新造物者」が説明なく休載された明治22年11月から明治23年1月に、3回に分けて掲載された。翻訳ではなく原文そのままの掲載であるが、小林清親の署名が入った挿絵は原作の挿絵と酷似している。『國のもとゐ』I, vi-II, iを参照。
- (29) 以下の説明は、「思ひ出の人々」113-14頁による。
- (30) 国立科学博物館は、所蔵する矢田部良吉の「東京高等女学校卒業式式辞」を明治23年の卒業式式辞と推定しているが、この中に今回の卒業生は「昨年ノ七月ニ卒業スベキナリシモ」、一昨年（明治22年）の9月に4ヶ年の課程を5ヶ年の課程に改めたために本日卒業することとなったと説明がある。『矢田部良吉デジタルアーカイブ』第5章。花圃が一時期教鞭をとった女子学習院の職員録によると、東京高等女学校の卒業年は明治21年と記されている。同職員録の写しは流通経済大学三宅雪嶺記念資料館所蔵。
- (31) 『女学雑誌』第207号 明治23年4月。202頁に同年3月29日に行われた卒業式における卒業生一覧があり、「撰科」卒業生4名の中に「田邊たつ子」の名前が認められる。
- (32) 『國のもとゐ』I, iii。明治22年6月。
- (33) 「思ひ出の人々」107頁。
- (34) 同上110-112頁。

- (35) 同上111－113頁。
- (36) 花圃は自らの出生日について、戸籍に記録される明治元年12月23日より少し遅いはずと後年回想している。父親の愛人に同じ頃女兒が生まれたため、本妻の子がそれより遅いのは都合が悪いと、その前に生まれたことにしたと述べている。「思ひ出の人々」106頁。ただし、三宅雪嶺記念資料館所蔵の女子学習院の職員録写しでは、生年月日は「明治元年拾月五日生」と記されている。
- (37) 大塚美保「東京を駆けめぐる女子学習者——一八八〇年代の小金井喜美子——」『文学』42-58頁。
- (38) 同上、46頁。
- (39) 三宅花圃「名伊達」『女子文壇』(4) 1 46-48頁。
- (40) 青山なを『明治女学校の研究』410頁。

主要参考文献

- 青山なを『明治女学校の研究』慶應通信、1982年。
- 朝井まかて『恋歌』講談社、2013年。
- 「磯野徳三郎」『日本近代文学大事典』*JapanKnowledge*。2023年10月8日アクセス。<https://japanknowledge.com>
- 大塚美保「東京を駆けめぐる女子学習者——一八八〇年代の小金井喜美子——」『文学』17(6) 2016年、42-58頁。
- 大森美香「花と葉」『スピン』第2、3、4、5号、2022-2023年。
- 加藤詔士「工部大学校書房掛猪俣昌武とお雇い教師ヘンリー・ダイアー」『東京大学史紀要』23 (2005) 25-39。2023年3月23日アクセス。
<https://www.u-tokyo.ac.jp/content/400005498.pdf>
- 神崎清編『現代婦人伝』中央公論社1940年。国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1685072> 2023年9月18日アクセス。

木内昇『万波を翔る』日本経済新聞社 2019年。

木山実「三井物産草創期の海外店舗展開とその要員」『経営史学』第35巻
第3号 1-27頁。

久保天髓編述『現代才媛文範』金刺芳流堂。明治42（1909）年。

河野龍也「二人の夏子—樋口一葉と伊東夏子—」『年報』第35号（2016）
160-87頁。

「古代をのぞく海外旅日記—杉浦譲の「文久奉使日記」から」『国立国会
図書館建制資料室 日記の世界』2023年9月14日アクセス。[https://
www.ndl.go.jp/nikki/column/02/](https://www.ndl.go.jp/nikki/column/02/)

塩田良平「三宅花圃」木俣修，川副国基，長谷川泉編『現代文学講座：
人と作品第3集（明治篇第3）』明治書院，1961年 DOI: 10.11501/
1343852。

塩田良平『明治女流作家論』寧楽書房 1965年。

塩田良平『樋口一葉研究』中央公論社 1956年。

『女子学習院 大正八年職員録』（写し）流通経済大学三宅雪嶺記念資料館
所蔵。

滝藤満義『一葉文学 生成と展開』明治書院 1998年。

「田辺太一」『近代日本人の肖像』国立国会図書館2023年9月14日アクセ
ス。<https://www.ndl.go.jp/portrait/datas/6113/>

中川僚子「『フランケンシュタイン』明治期初邦訳(2)「新造物者」の底本
について」『聖心女子大学論叢』第139集（2022）3-27頁。

西川正治郎編『田辺朔郎博士60年史』山田忠三 1924年。DOI: 10.11501/
978761

「沼津兵学校附属小学校が『集成舎』となる」沼津市HP。2023年9月18日
アクセス。[https://www.city.numazu.shizuoka.jp/shisei/profile/rekishih/
genshikara/syusei.htm](https://www.city.numazu.shizuoka.jp/shisei/profile/rekishih/genshikara/syusei.htm)

「HUBの歴史 第1篇商法講習所の設立から大学昇格まで 1875-1920」
一橋大学大学院経営管理研究科。2023年9月18日アクセス。chrome-

extension://efaidnbmnribpcajpcgicfindmkaj/https://hermes-ir.lib.
hit-u.ac.jp/hermes/ir/sc/45842/HIT0600101.pdf

樋口一葉「雑記5 筆すさひ 一」『樋口一葉全集』第3巻（下）筑摩書
房 1978年。

樋口雄彦「生徒のノートからみた沼津兵学校の教育」『国立歴史民俗博物
館研究報告』第133集 2006年12月 359-75頁

『丸善百年史』2023年3月20日アクセス。https://www.maruzen- publishing.
co.jp/contents/100nenshi/index3.html

三宅花圃「思ひ出の人々」『婦人公論』1939年4月 106-122頁。

三宅花圃「薺の鶯・一葉・桃水」『国語と国文学』1934〔昭和9〕年8月。

三宅花圃「女伊達」『女子文壇』(4)1 明治41年1月 46-48頁。

宮本百合子「婦人と文学」『宮本百合子選集』第11巻 新日本出版社
1969年 308-506頁。

屋木瑞穂「樋口一葉「琴の音」に関する一考察:ヴィクトル・ユーゴー『哀
史』との比較を通して」『三重大学日本語学文学』10 (1999) 107-121頁。

矢田部良吉「東京高等女学校卒業式式辞（推定）」『矢田部良吉デジタル
アーカイブ』。2023年3月15日アクセス https://dex.kahaku.go.jp/
yatabe/chapter/5

横田順彌「明治時代は謎だらけ!『フランケンシュタイン』の初訳につい
て」『日本古書通信』12-14頁。

横田順彌「『近代日本奇想小説史 明治編』ビラルプレス 2011年。

「横浜鎖港談判施設団の一行」『東京大学コレクション』2023年9月14日ア
クセス。https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/html/tenjikai/tenjikai95-2/bak2.
html

米川伸一「三井物産草創期の海外店舗展開とその要員」『経営史学』第35
巻第3号 1-26頁。

「レファレンス事例（管理番号 D2007M1326）」『レファレンス協同デー
タベース』2021年10月8日 2023年10月12日アクセス https://crd.

『フランケンシュタイン』 明治中期の初邦訳(2)「新造物者」の翻訳者をめぐって

ndl.go.jp/reference/modules/d3ndlcrdentry/index.php?page=ref_view&id=1000044637

Nakagawa, Tomoko. "Meiji Japan Responds to *Frankenstein*: The 1889–1890 translation “The New Creator” and the Illustrations.” *The Afterlives of Frankenstein*. Bloomsbury, 2024. Forthcoming.

“Passion and Principle.” *Chambers’s Miscellany of Instructive and Entertaining Tracts*. W. and R. Chambers, 1870.

